

旧東海道「品川宿」を歩く

長谷川 修

江戸時代の旧街道を歩くことが流行っているが、往時の趣きを残している所はほとんどない。そんな中で品川区の旧東海道は、第一京浜の東側（海側）に沿って、京浜急行北品川駅から鈴木森刑場跡までの三・五キロ程の道で、往時の道幅（意外に狭く片道一車線ほど）と曲折がそのまま残っている。東海道五三次一番の品川宿はこの街道の北品川から青物横丁付近までの二キロ足らずで、低層の商店が軒を連ねる通りは筆者お気に入りの散歩道だ。

北品川から八ツ山橋の京急踏切を渡ると「是従南 品川宿」の案内杭があり、早速江戸にタイムスリップする。品川宿に入ってしばらく歩くと、左側のコンビニ前に「土蔵相模跡」の案内板がある。大妓楼の相模屋は幕末の志士が御殿山の英国公使館焼き打ちの密議をこらした所であり、日活の川島雄三監督が撮った異色の名作『幕末太陽傳』の舞台にもなった。更に進むと、今は公園となっている「品川本陣跡」、目黒川にかかる橋の袂には北・南両品川宿の境界の案内板がある。その他、お休み処や町名由来の案内板、「街道松の広場」等もあって興味は尽きない。

品川宿が賑わったのは、宿場本来の目的でなく、江戸に一番近いことにあつたようだ。即ち、江戸を発つ者は、ここで見送り人と道中の無事を祈り酒席を持ち、江戸に入る者は、出迎え人と会ったり、長旅で汚れた衣類や履物を調べたりした。

旧東海道は本来の海岸に近い。海側を少し降りると迷い込んだ鯨を悼む「鯨塚」や、幕末の黒船来航に備えた「お台場跡」がある。浮世絵の品川宿には白い帆船が定番であり、落語『品川心中』で海に身を投げるのも納得できる。また品川は宿場町だけでなく漁師町でもあった。今も商店街では穴子天井の看板が目につくし、海苔問屋も健在だ。

かつてこの道を行き交ったであろう、参勤交代の西国大名、江戸城参内の朝鮮通信使やオランダ商館長、お伊勢参りや富士山詣の庶民等について、いろいろと思いを馳せながら歩くのは楽しい。